

特集 消化器 “救急”内視鏡 —適応と実践

近年、消化器内視鏡診療は、内視鏡機器の進化や各種デバイスの開発などにより、目覚ましい進歩を遂げています。救急医療の現場においても内視鏡の役割はますます拡がっており、従来は治療に難渋していた疾患であっても、内視鏡により低侵襲的に治療が可能となってきました。一方で、時の流れとともに疾病構造は変化しており、10年前と比較して緊急内視鏡の適応も様変わりしています。また、多職種連携の重要性も強く認識されるようになり、救急現場における緊急内視鏡の施行環境も変化していることでしょう。

本誌「救急医学」では、2014年に「救急医のための消化器緊急内視鏡」と題した特集号を発刊しましたが、上記のような背景を鑑みて、このたび10年ぶりに、救急医療における消化器内視鏡をテーマとして特集を企画いたしました。

原稿のご執筆は内視鏡診療のエキスパートの先生方に依頼をし、現在の消化器緊急内視鏡の役割・体制、および各疾患における最新の内視鏡検査・治療の適応や具体的方法を解説いただきました。また、上記のとおり、緊急内視鏡においては多職種連携も欠かせない要素であり、内視鏡医・救急医・多職種スタッフなどの連携のあり方と、術前～術後の患者管理を含む介助者の役割にも焦点を当てています。

より多くの救急現場で、より適切・有効に、内視鏡診療が実践されるよう、本特集で知識と興味を深めていただければ幸いです。

特集企画ゲストエディター

獨協医科大学医学部 内科学（消化器）講座

入澤 篤志